

強い心と弱い心

富山県

婦中町少年剣道教室

小学6年 中村 真颯弥

強い心は相手に負けない心、弱い心はすぐ諦めてしまうことだと思っていた。でも、今は違う。コロナウイルスの休校が終わってから、友達との関係がうまくいかなくなり、学校に行くことが嫌になった。心の中は「ちゃんと行かなければ。」という思いと、「どうしても行きたくない。」という思いでぐちゃぐちゃだった。心と身体は思った以上につながっていて、学校にいると息苦しさを感じ、毎朝頭が痛くなった。ぼくは、不登校になった。学校に行かない罪悪感は大きかったけど、だからといって学校に行く勇気はなかった。だんだんと「本当は学校に行きたい。だけど、あいつらのせいで行けない。」と思うようになった。

それから剣道にも気持ちが入らず、先生に注意されることが増えた。楽しかった剣道も嫌になった。「もう剣道もやめてやる。」一日のほとんどを一人でゲームばかりしていたぼくは、何もかもが面倒になっていた。剣道をやめるための言い訳を考えた。「もっとゲームをしたい。」「叱られたくない。」「面倒くさいし疲れる。」思いついた言い訳は、どれもたいした理由にはならなかった。

やめる言い訳を考えていたのに、剣道で学んだことが次々と思い出されてきた。剣道の稽古は単なる運動ではない。あいさつの大切さや、相手を敬う心、集団の中で協力すること、自分で考えて動くこと、小さい子の面倒をみること、防具の手入れをして大切に扱うこと。そして何より試合で勝った時や思うように打てた時の達成感。本当は剣道が大好きだったことを思い出した。

道場へいけば、先生や仲間に出会える。一生懸命教えて下さる先生、けんかもするけどずっと一緒に稽古をしてきた仲間がいる。学校に行っていないぼくにとって、道場は大切な居場所だと気が付いた。精一杯声を出し、夢中で竹刀を振っている間は、不登校の罪悪感を忘れ「普通」に戻れたような気がした。稽古が終わると、とてもすっきりしていて、体は疲れるけど、心は充電されていった。

ぼくは、先生に「おまえはかっこばかりつけて、『なにくそ負けるか』という気持ちが足りん。」とよく言われる。前は「そんな気はないし、相手に負けたくない気持ちだってある！」と思っていたけど、不登校になって、その言葉がやけにちくちくした。学校に行けないのは友達のせい、剣道に行きたくないのは先生のせい。都合が悪いといつも誰かのせいにして、ぼくは悪くないと言い訳をしてきた。「でも」「だって」「どうせ」このセリフを言う時は大抵言い訳だ。剣道で教わった「強い心」は、相手に負けない心だと思っていたけど、ぼくがいつも負けていたのは「自分」なんじゃないか、と思った。困難なことがあった時、言い訳

をして逃げるのがぼくの「弱い心」とするなら、逃げたい気持ちに「なにくそ負けるか」と一歩前が出るのがぼくに必要な「強い心」なんじゃないか。

学校からも逃げてばかりではだめだ。自分から一歩前に出なければ変わらない。長く休んだ学校へ行くのは怖かったけど、先生や家族の応援もあり、少しずつ学校へ行くようになった。初めの頃は、図書室登校や少人数教室で過ごすこともあったけど、今では毎日登校でき、運動会の応援リーダーやクラブの部長を務めることもできた。

剣道でも何をするにしても、相手に負けたくないと思う。でも一番負けてはいけないのは自分の弱い心だ。ぼくは試合になるとつい相手の出方を待ってしまう。「打たれたら負ける。」「返されたらどうしよう。」そう思うと小手先ばかりの技になり思い切って打てなくなる。でもそんな時こそ自分の弱い心との勝負だ。自分を変えられる。自分を変えてくれた剣道に感謝し、「なにくそ負けるか。」という強い心で、自分から一歩踏み出し、思い切って打ち込んでいける剣道をしたい。